

A—1 唾液分泌量から見た抹茶に就いて

伊藤秀三郎

1. 抹茶を飲用した場合に於ける反射唾液量の計測。
2. 第14回総会食物学34の場合と同様。

被験者には性別を考慮しない成人若干名を採用し、唾液量測定には、一定の重量(A)に秤量した脱脂綿を用意し、3分間被験者の口腔内舌下に入れ、唾液を其綿にしみこませる。綿を再秤量するとBとなるので、唾液量は $B-A$ として算出出来る。但しこの場合のAは0.2gである。

実験は3段階とし、抹茶飲用前、飲用後、更にその後における唾液量を計測することにした。

条件(種類、濃度、甘味=菓子、温度等)による反射唾液量の変化は、飲用前の唾液量を基準とする変化比で求めた。

3. 抹茶の種類に就いていえば、唾液量は抹茶飲用に依って、いずれも減少する。

抹茶の濃度に就いていえば、高い場合唾液量はむしろ増加する傾向である。

抹茶と甘味とに就いていえば、甘味の存在は唾液量を増加させる。

抹茶の温度に就いていえば、高い程唾液量は多い。